



## 音楽と人工知能研究のはざまにて



### PROFILE

日本大学理工学部教授・作曲家  
保谷 哲也さん  
Tetsuya Hoya

- 1969年 東京都生まれ
- 1988年 日本大学第二高等学校卒業
- 1992年 明治大学工学部電子通信工学科卒業
- 1994年 明治大学大学院工学研究科電気工学専攻博士前期課程修了
- 1998年 英インペリアルカレッジロンドン大学院博士後期課程修了 (Ph.D./DIC)
- 1997年 9月～2000年 7月 英インペリアルカレッジロンドン大学 リサーチアソシエイト (ポスドク研究員)
- 2000年 10月～2006年 3月 理化学研究所・脳科学総合研究センター 研究員
- 2007年 日本大学理工学部数学科 准教授
- 2017年 及川音楽事務所主催・第39回新人オーディション作曲部門特別賞受賞
- 2020年 ゴールデンキー国際ピアノ作曲コンクール第1位 (最高位)
- 2020年 日本大学理工学部数学科・日本大学大学院理工学研究科情報科学専攻 教授  
同年 東京国際芸術協会 (TIAA) 主催・全日本作曲家コンクール入選

小さい頃から音楽好きでした。小学3年生の頃、「近所のピアノ教室に通いたい」と自ら言い出したことがおそろしくピアノに触れるきっかけになったと思います。また、音楽以外に、「なぜ磁石は数ある金属の中でも鉄しか引き付けないのだろうか？」という素朴な疑問を幼い頃から持ち続けているうちに理系分野に対しても目が向くようになり、ひいては明治大学工学部電子通信工学科 (現・理工学部電気電子生命工学科) に進学することになったと思います。

現在は、日本大学理工学部にて教鞭をとる傍ら人工知能の研究を進めていますが、それと並行して相変わらず音楽活動もしています。私にとって音楽と人工知能の研究とは切っても切れない関係で、本記事タイトルにもありますように、常にその「はざま」に自らが在るような気がしてなりません。また、結局「何か新しいものを産み出す」ことが好きで作曲 (音楽) と研究活動の両方を続けてきた、ということにごく最近ようやく気付きました。

明治大学に入学した直後、ともかくピアノが弾けるサークルに属したくて「明大New Wave Jazz Orchestra (前身・明大ハワイアン)」に入部しました。実はそれまでもつぱらクラシック曲ばかり弾いていたので、ジャズのようなリズム重視の音楽に慣れ親しむまでかなり苦労しましたが、その経験を通して、クラシックとジャズというある意味相反する音楽ジャンル、ひいては特定の音楽ジャンルに依らず今ではどのような音楽でも親しめるようになったように思います。

また、当時は人間関係において不器用でぎこちなかったことによりいろいろ悩んだ時期でもありました。そんな中、3年生となりゼミ選びの際には、当時、計測制御研究室で行っていた音声に関する研究に興味を持ち、小川康男先生のゼミに所属しました。研究室は小川先生のほか、石田義久先生、鎌田弘之先生、および電気工学科・本多高先生の4名の指導教員による大部屋でした。その後、石田先生指導の下、大学院博士前期課程に進学し、さて就

職をどうしようかと考えていたある日、石田先生より「君、イギリスに留学しないか」という一言がありました。今思えばそれが大きな転機を迎えるきつ

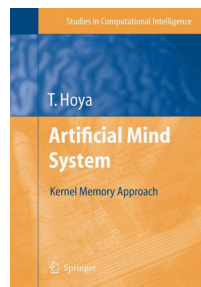
かけとなったのですが、修了後渡英し、インペリアルカレッジロンドン大学の博士後期課程に進学しました。3年後、博士後期課程を修了すると同時に同大学院にポスドク研究員として残り、計6年をロンドンにて過ごすことになりましたが、その間、イギリスのほかヨーロッパ各地を訪れる機会がありました。ロンドン大学にはヨーロッパのみならず世界各地から学生・教員が集まっていたおかげで、さまざまな国の人たちとも交流が持てました。そういった中で過すうち、学部時代に持っていたコンプレックスもいつしかなくなっていました。ですので、ロンドンをベースに6年間ヨーロッパに滞在した経験は、研究・音楽のみならず私には大変貴重な財産です。

それから話は飛びますが、2018年、4月と12月の2回にわたって静岡県東部にて開催されたピアノフェスティバルに出演する機会があり、そこで即興演奏をした曲をのちに聴き直して再現できるように24の前奏曲としてきちんと譜面にしました。今年、イン

### 著書のご案内



譜面『24の即興的前奏曲』  
(東京国際芸術協会・2020年8月)



学術書『Artificial Mind System - Kernel Memory Approach』(Springer Verlag・2005)

ターネット上で募っていたゴールデンキー国際ピアノ作曲コンクールと東京国際芸術協会主催の作曲コンクールをたまたま見つけ、ダメもとでそのいくつかを提出してみたところ、思いがけず受賞してしまいました。いったん譜面化しておけば、自ら再現するのみならず他の奏者が弾いたものを客観的に聴くことができ、また新たな面白いアイデアが浮かぶような気がします。今後も好きな作曲・演奏活動および研究活動にまい進したいと思います。